



TITLE:

(綜説)血尿の臨床的意義について

AUTHOR(S):

宮崎, 重

CITATION:

宮崎, 重. (綜説)血尿の臨床的意義について. 泌尿器科紀要 1957, 3(3): 181-182

ISSUE DATE:

1957-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111431>

RIGHT:

泌尿器科紀要

第 3 卷 第 3 号

昭和 32 年 3 月

綜 説

血尿の臨床的意義について

京都大学医学部泌尿器科学教室 宮 崎 重
(現在米国 Iowa 大学留学中 主任 R. H. Flocks 教授)

私は最近 C. C. Higgins の血尿に関する論文を読んだので此処にその要旨を紹介すると共に、他の記載をも参考にし、血尿について考察を加えてみたいと思う。但し現在米国に於ては腎結核は極めて稀にしか見られず、従つて本論文に於ては腎結核による血尿に対する考慮があまり払われていない。彼は血尿と尿路腫瘍との関係を最も重要視し、本論文も「尿路腫瘍の早期発見」と言う点に一般医師の注意を喚起するのが、その目的である様に思われる。

血尿の意義を充分明らかにする様な統計は今日尙不充分である。血尿の持続期間乃至初発血尿から診断が下されるまでの時期に就ては 1925 年 Kretschmer は 933 例の血尿を有する患者にて平均 2.39 年であつたと云い、最近の Higgins の報告では 1600 人の血尿患者にては平均 2.59 年となつている。又尿路疾患に基く血尿を、Doss が 5965 例にて調べた所によると、尿道 5%、前立腺 14%、膀胱 30%、尿管 9%、腎臓 43% であり此の中、腫瘍 28%、炎症 31%、異物 20%、外傷 4%、結核 9%、その他 7% となつている。唯この統計で尿結石によるものを別記していない点は理解し難い。1933 年 Rathhum が「血尿を有する患者の半数は尿路の腫瘍がその原因となつている」と述べ「此の事を一般臨床家に印象づける事は、癌による死亡率を減少せしめる為のあらゆる他の方法に優るものである」と言つており、Higgins も此の言葉は 20 年後の今日に於ても、当てはまると言つている。

次に Cleveland Clinic に於ける経験から Higgins は血尿を分類して、その主な原因を次の如く列挙している。

A. 全身の疾患と關聯して起こる血尿

急性発熱性疾患、慢性炎症性疾患、血液疾患、食餌性疾患、或種の薬剤によつて起こるもの、その他原因不明の疾患。

B. 泌尿生殖器の疾患によつて起こる血尿

腎臓、尿管、膀胱、膀胱頸部、尿道の疾患。

C. 尿路外の病的変化と關聯して起こる血尿。

急性虫垂炎、大腸の憩室炎、大腸、直腸及び骨盤臓器の腫瘍、卵管炎。

排尿初期血尿は前部尿道 (Higgins)、尿道或は前立腺 (Colby)、尿道、前立腺或は精囊 (Cahill) に由来するとされ、全血尿は膀胱、尿管或は腎臓 (Higgins, Colby) に由来するとされ、Cahill は之に prostatism も加えている。終末時血尿に就ては、膀胱三角部並びに頸部、

後部尿道に由来するとされており (Colby, Cahill), Higgins も膀胱よりも寧ろ後部尿道に原因していると述べている。

顕微鏡的血尿の臨床的意義も古くから議論された所である。之に関しては Larcon 及び Carter が、保険に加入する為に健康診断を受けた3000人の青年男子の尿を検査し、2484人はその尿中に赤血球を認めなかつたが、60人即ち2%に於て、その尿沈渣中に強拡大で1視野に2~3ケの赤血球を認め、更に此の中の23例、即ち0.7%に於て1視野に4~5ケの赤血球を認めたと述べている。そして以上の成績並びに之に関連した臨床的検索の結果から「強拡大で1視野に2ケ以上の赤血球が繰返し見出される時には臨床上有意味がある」と結論している。

Higgins は「所謂本態性血尿即ち原因不明の血尿と言うものは、綿密な検査を行えば実際には稀であると考えられる」と述べているが、Thompson の“renal epistaxis”(腎の出血)も存在するかも知れない

次に各年齢層に於ける血尿の臨床的意義に関して、Higgins は次の如く記している。

(1) 1才以下：腎の Wilm's tumor を疑うのが最も大切であるが、この中血尿を伴うものは10~18%に過ぎない。その他この年齢の男児では、外尿道口の潰瘍を伴う狭窄が血尿の原因となっている場合もある。(2) 1~5才：膀胱炎が血尿の原因である事が最も多く、次で腎盂腎炎、糸球体腎炎の順に多い。(3) 5~10才：糸球体腎炎による事が最も多く、次で膀胱炎、腎盂腎炎の順である。(4) 11~30才：炎症性疾患部即ち膀胱炎や腎盂腎炎による事が最も多く、結石や膀胱乳嘴腫等による事は少い。(5) 31~40才：炎症性疾患に起因する事が最も多いが、之に次いで膀胱乳嘴腫、腎結石の順である。女子に於ても、炎症性疾患就中膀胱炎に起因する事の最も多い事は男子と同様であるが之に次いで結石、膀胱乳嘴腫の順である。(6) 41~50才：男子にては膀胱の乳嘴腫及び悪性腫瘍が、血尿の原因として最も普通に見られる様になり、それに次いで結石、炎症性疾患が原因となつている事が多い。又女子にては炎症性疾患、結石、次いで膀胱腫瘍の順である。(7) 51~60才：膀胱腫瘍が此の年齢の男子の血尿の最も多い原因である。次いで前立腺肥大、前立腺癌、膀胱炎の順に多い。女子にても膀胱腫瘍による事が最も多く、次いで膀胱炎である。(8) 61~70才：男子の血尿の原因は、良性及び悪性の前立腺腫瘍に由来するものが殆んどその大部分を占めるに到り、次いで膀胱腫瘍、膀胱炎の順となるが、女子にては膀胱腫瘍最も多く、次いで膀胱炎の順である。

即ち以上 Higgins の述べる所を要約すれば、乳幼時期の血尿に対して Wilm's tumor を考慮する他は、男子の血尿は大凡40才位までは尿路の炎症に起因する事が最も多く、此の年齢を超える頃から膀胱腫瘍によるものが多くなり、60才を過ぎると前立腺腫瘍がその原因である事が最も多い。又女子の血尿は50才位までは尿路の炎症、就中膀胱炎によつておこる事が多いが50才以上になると膀胱腫瘍に起因する事が一番多くなる。又男女とも30才代、40才代のものでは、尿路結石も血尿の原因として非常に重要であり、夫々第二番目に多い原因となつている。要するに悪性腫瘍と年齢との関係は大体に上記の如くであるが、然し如何なる年齢の者に於ても発生し得ると言う事実、及び血尿が早期の尿路腫瘍の唯一の症状である場合が少くないと言う事を銘記しておく事が肝要であろう